

小児看護における実習指導に関する研究 —指導者の認識に焦点をあてて—

甲斐鈴恵 (応用看護学)

【キーワード】 小児看護実習, 指導過程, 実感を伴う体験, 学生の変化, 指導者の認識

本研究は、小児看護実習指導において、学生の心が動き患児への関心が高まり、主体的に看護実践できるための小児看護実習の指導指針を得ることを目的としている。

研究対象は、小児看護実習の指導過程における指導者の認識である。実習指導場面を概観し、学生の認識および言動が変化・発展し、患児にもよい変化があったと思われる6事例10場面を研究素材とした。

研究方法は、研究素材をプロセスレコードに再構成し、それぞれの場面について〈指導場面における学生の変化〉を取り出した。学生の変化から、学生を主体的な看護実践に導くためには指導者のどのような判断過程があるのかを見つめ、プロセスレコードの指導者の認識および表現に着目し〈指導場面における指導の意味〉を取り出した。指導の意味から、学生に変化をもたらした〈指導場面における指導の特徴〉を取り出し、その指導の特徴を、共通性と相異性から比較検討し類別して並べ、キーワードを踏まえ小児看護実習の指導指針を導き出した。以下に結果を示す。

- 1 子どもの対象特性からその子どもに必要な看護を見抜き、学生の学習過程と重ねて学生の頭の中を予測し、学生への指導を判断する
- 2 表現能力が未熟で自分の状態や思いをうまく表現できない子どもの状態をより鮮明に描けるように、学生が子どものからだの内部や生活過程や特徴を描き、今の子どもの状態を迫体験できるように導く
- 3 大人では体験できない子どもの素直な反応に戸惑った学生の感情を大切にし、その体験をチャンスとして指導に活かす
- 4 年齢に応じた世話やあそびを工夫しながら子どもがよい状態へと変化する看護場面を学生と共につくり出し、子どものもてる力を学生が実感できるように導く
- 5 学生が実践から気づいた子どもの事実を、子どもの特徴や看護の専門知識と重ねて意味づけ、関わりの根拠が実感できるように導く
- 6 表現能力が未熟で自分の状態や思いをうまく表現できない子どもの特徴を踏まえ、学生が子どもと看護職者の立場を行き来しながら自己の実践を振り返り、評価・修正できるように導く
- 7 学生が子どもとの関わりを通して実感したことを次の看護実践に活かし、学生の看護が発展していることを確認する

学生が主体的に看護実践できるためには、現場で起こっている様々な現象が根拠と結びついて実感を伴い「わかる」こと、そのわかったことを子どもの反応に重ねて考え、看護実践できることが重要であることが確認できた。学生が主体的に関わると、子どもの事実がさらに見えるようになり、学生の感情が揺れ動くという看護実践の深まりと学習過程の構造も確認できた。